

マンガ

翻訳者 園部 哲

にあるショッピングセンターのなかにあった。

だが、そこまでは三キロ以上ある。遠さなども暑熱の日照りも気にかげず、本好きの四人が、大学のある丘を下りて書店をめざした。

ロンドン大学の日本語会話クラスで手伝いを

したことがある。初心者相手なので「なぜ日本語を学びたいのですか？」などと問うようなレベルだ。一番多かったのが「日本のマンガが好きだから」という答。そのときあらためて、日本マンガの浸透度を認識した。

スピノザを短髪にしたような風貌のオランダ人青年は小説通で、ヨーロッパで今読むべき小説はこれだと、平積みの本を指さした。三年前に出たウンベルト・エーコの『薔薇の名前』。

しかし、寿司の流行と定着のタイミングおよ

び速度でパリがまさっていたように、欧州におけるマンガの流行もフランスが先陣を切っていた。思い返せば、浮世絵をはじめとする日本の美術品を「発見」し、ジャポニスムという動きの中心になったのもフランスだし、彼らの感性は鋭敏である。

日本のマンガがフランス語に訳されはじめたのを知ったのは、もう四十年近く前だった。そのとき僕は南仏のニース大学で夏季フランス語講習を受けていた。ある土曜日の午後、クラスの中と本屋へ行くということになった。ニースで一番充実している書店は、町の中心部

一緒に来たあとの二人はドイツ人とギリシャ人だったが、アテネから来た女の子の姿が見えなかった。しばらくして、店の奥のほうで床にすわりこんでなにやら熟読中の彼女を見つけた。バンド・デシネ (bande dessinée) のコーナー、つまりマンガ・コーナーである。彼女はそのマンガ本を振ってみせ、「知ってるでしょう、ゲン・ディロシマ (Gen d'Hiroshima) ？」と言った。

表紙を見せてもらって、それが『はだしのゲン』のフランス語版であることを知った。仏語訳では『広島のゲン』という題になっていた。そうしないと、それが原爆を落とされた町の物語だとアピールできないと判断したのだろう。

「フランスに来たらこれを見つけようと思っ

た。フランスに来たらこれを見つけようと思っ

ていたの」と彼女は嬉しそうに言った。

というところはギリシヤにいた頃から知っていたのかと尋ねると、アテネのフランス学院で先生が教えてくれてみんな読みたがっていたけれど、フランス語専門書店にはまだ届いていなかったのだと言う。「三か月前に出たばかりだから全部読んでから帰ると、彼女はあぐらを組み直し、ウェーブのかかった髪を片耳にかけてマンガを読みふけた。僕ら三人は彼女を置いて、サンダルを鳴らしながら帰途についた。

それから十数年が過ぎ、ロンドン郊外で暮らしはじめたとき、近所の英国人夫婦と友だちになった。妻はソフィ、夫はフレディという。子どものない二人は、数年前に里子を養取していた。里子は知人夫婦の八歳になる一人娘だった。実親である母親は重度のアルコール依存症、父親は精神的に崩壊して入退院を繰り返してしており、二人は別居状態にあった。居場所を失った娘を保護してやろうと、友人夫婦は彼女を引き取ったのである。

フローレンスという名前のその子は痩せた子

で、子鹿のようだった。行儀のいい子だったが、どこかおどおどとした感じがあった。

日本大使館で『はだしのゲン』のアニメーション上映があるということを知ったソフィは、十歳になっていたフローレンスを連れて行くことにした。直前になって大使館の人が、あれはショッキングな映像を含むから、娘さんには刺激が強すぎるのではないかと心配してくれた。本人は平気だというし、ソフィもたかがマンガじゃないかと高をくくっていたところもあった。

当日大使館へ行くと、「万二、フローレンスちゃんの気分が悪くなったらすぐ退出できるように」と職員が二人の席を出入り口の一番近いところに設けてくれていた。映画が始まる。のどかな雰囲気が始まるアニメーションだったが、原爆投下後の焼けただれ、眼球を突出させてうめきながら歩く半死者たちの描写は、ソフィであっても正視に耐えない。フローレンスを見ると、真剣な顔でスクリーンを凝視している。だいたいじょうぶかと尋ねても、こっくりと頷くだけだった。

帰りの地下鉄のなかでは口を閉じていたフロ

ーレンスだったが、家につくなり「ダディに電話してもいい？」と訊いた。夫婦は驚いた。自閉気味のフローレンスが父親に電話をしたいなどと言いだしたのは、それが初めてだったから。フローレンスは玄関ホールの電話で父親と話をしていた。ソフィとフレディは別の部屋にいて、電話はものの数分で終わった。

後日、フローレンスの父親が、娘からもらった初めての電話についてソフィに語った。

「あの映画を見て、家族の愛って何なのか分かった。そうフローレンスは言いたかったんです」